

# 夏の幽霊

吉元昭治

幽霊 「もしもし」

という後からの声

か 夏の風景と申しますと、ます思い浮かべるのが、うらわ、  
蚊帳、蚊やり、打ち水、縁台、すだれ、ほたる、花火に浴衣などがありますが、このうちにはもう遠い昔のものになってしまったものもあるようです。

これからのお話は、あいもかわらないバカバカしい、ユーレイのおはなしです。「幽霊の正体見たり枯尾花」というくらい、実際にユーレイなどはこわいものでもありません。おそろしい面相で人をおどろかし、それでゾクゾクとして厚さもとんでもしまうという事でしょうか。冬にユーレイ（雪女といふのはありますが）が出たという話はないようですが、ユーレイも冬眠するのでしょうか。

今日も今日とて柴又はフーテンの寅さんのようなテキ屋の銀太という者が旅を重ねて夏のある夜、どうした事か道に迷い、とある墓地に迷いこんでしました。

銀太 「なんだかうす気味悪いところにやつて來たぜ。どうも背中がゾクゾクしてきた。おまけにいやにうすらなま温かい風が吹いて来やがるぜ。やや、あつちにもこっちにも塔婆が立つてらあ、おまけに破れ提灯ときたね。これで舞台はおそろいだ」

銀太 「いよいよおでましかい」

幽霊 「もしもし」

ぶり返るとそこにユーレイ

幽霊 「もしもし」

銀太 「何んでえ」

幽霊 「ウラメシヤ」

銀太 「よく聞こえない、もう一度ぬかせ」

幽霊 「ウラメシヤ、ウラメシヤ」

銀太 「うるせいやい、さつきからきていいれば、ウラメシ

幽霊 「これがユーレイの御挨拶で」

銀太

「そうかい、それならユーパよ、おめえは本当にユーレイかい。俺はさつきから腹がへつてたまんね、このうらにメンヤがあるならつれていけ」

幽靈 「ウラメンヤ、魂魄この世に留まりて恨みはらさずに

おくべきか」

銀太 「何だと、コンパクトだと」

幽靈 「これもユーレイのきまり文句で、ところでのコンパクトてなんでやす」

銀太 「おめえ、コンパクトもしらねえのか、コンパクトと

は女の化粧道具だ。それも知らないとはお前はいつ頃の人間だい」

幽靈 「よく聞いて下さいました。私はザツと今を去ること百年以上前の人間です」

銀太 「へえ、するてえと文明開化の御時世だな。この稼業

幽靈 「別に稼業といつてもユーレイをしていて金をもうけるのではないので」

銀太 「そうかい、お互に今日は東にあしたは西に、ゆくえ行方定めぬ旅鳥、同業だ、それでなんでユーレイに身をおとしたんだい」

幽靈 「別に身をおとしたのではないのですが、話せば長い事ながらこの世に未練があつたからです」

銀太

「よかつたら、俺もひまだ、一寸その話せば長い話を聞いてやろうじやねえか」

幽靈

「私のこの世の名は嵐勘助あらしかんすけというたび役者はしくれで、少しほ名のしれた歌舞伎俳優でした。得意の出しものは『らくだの馬さん』でした」

銀太

「何んでえ、らくだと馬が何で二つ並んでいるんでえ、らくだと馬とは違うだろう」

幽靈

「らくだの馬さんというのは役の名で、長屋きつての悪わるで皆から嫌がられていましたが、ある時、ふぐを食つて死んでしました。そこに、らくだに輪をかけたよう

な悪でらくだの遊び仲間の半次がやってきます。そこへまた、日頃出入りしている古道具屋の久六てえのがきました「一人でらくだが死んだのを見ます。半次は、いくら嫌われ者でも死んだら仮だ。とむらいの一つは出してやろうと、久六に、葬式費用にするから家中のものをみんな買つていけといいますが、家の中にはもう何もありません。そこで半次は長屋中にらくだが死んだ事を久六にいわせますと、長屋の連中は、皆あよかつた、らくだが死んだ、そりやめでたいお祝いだ。なんで葬式費用を出さなきやならねえ。お祝いだ。そちらからもつてきやがれ」と逆に追い出されます。

銀太

「それでどうした」

幽靈

「こんどは半次、それならと、あの強欲な大家にかけあいに行かせます。でもやはりけんもほろの御挨拶。半次はそれなら、らくだの死骸をかついでいって『カンカンノ』を踊らせると申しますと、「大家はそれは面白い、丁度ひまで困っている。俺はまだその『カンカンノ』という踊りは見たことがねえ、ぜひ見せてもらおう」というのです」

銀太  
幽靈

「うん、それでどうなつた」

「それならと半次は久六にらくだの死骸を背負わせて大家の家へ向かいます。ここからが私、嵐勘助の出番となります。久六におぶわれて大家の家にいきます。大家は香典なんかくれてやれねえ、たまつた家賃を早くもつてこいと力みます。そこで久六が『カンカンノ』を唄い、半次がらくだを抱いて、面白おかしく二人で呼吸を合わせて踊ります。大家とその家内は腰をぬかし、「やめてくれ、やめてくれ、わかった、わかった」と酒や肴を持たせ、二人をなだめて帰すという。そのあともありますが、ざつとこんな筋ですが一番の見せ場が私の踊ります『カンカンノ踊り』です」

銀太  
幽靈  
「何でえその『カンカンノ』とは」「カンカンとは海の向こうの言葉で『看看』と書くらしいのです。つまり『御用とお急ぎでない方はよつてら

つしやい、みてらっしやい』というようなもので、長崎でうまれて大阪、江戸で大そうはやつたといいます」

銀太  
幽靈

「それでおめえがその『カンカンノ踊り』の名手といふ事は分かつたが、なんでユーレイとなつたんだい」

「旅の一一座はあちこちをまわります。江戸について長興行をすることになり、私のらくだは大当たり、そればかりしていましたが、ふとした事から大店の娘のお好と

いうのと深い仲になりました。所詮浮草稼業の私と大店の娘とでは結ばれるはずもありません。思いあぐねて二人は駆けおち『たとえこの世で結ばれなくてもある世にあるという蓮の台』の上で一人して幸せになろう』と互いに手と手をとり合つて、右にヨロヨロ左にヨロヨロ、大川めざしてこの世の別れの道行きとなりました。折りしも遠く鐘の音、あれは冥土の道しるべ、三途の川の船出の合図と、大川の橋の上から身を投げました。私は袂に石を一杯つめていたので、そのままブクブク大往生となります」

銀太  
幽靈

「お好の野郎は悪い女で、身を投げる寸前、たもとの石をほうり出してとびこんだのでブカブカ浮かんで助かってしまいました」

銀太  
「その後お好は」

幽靈

「私はユーレイに身をやつし、あちこち尋ねますとお好は、やはりさる大店の若旦那と一緒になり幸せに暮らしたそうです」

銀太 「聞けば涙の物語りだ。こりや死んでも浮かばれねえつてことだ」

とつくづくユーレイを見て

銀太

「おめえは役者だけあってよく見ると水もしたたるい男だね。ユーレイは水にぬれてビショビショしている

幽靈 「お前の額の三角の布は何んでえ」

「これはユーレイの看板です。ユーレイの生活が長くなる程、またユーレイの年齢が高い程、位くらべが高くなつて、この三角が大きくなります」

銀太 「それじや今日や昨日のユーレイはほんの端切はしれきだな」

幽靈 「ユーレイの先輩にききますと、まだお会いした事はありませんが、ユーレイ大明神は金色の三角、ユーレイ

菩薩は銀色の三角だそうです」

銀太 「今インフルエンザが流行している。おめえの三角を

はずして口にあてマスクとしてインフルエンザの予防

にした方がよさそうだぜ」

幽靈 「ユーレイは死んでいるので風邪などひきません。こ

の三角はユーレイの目印なのではすわけにはまいります

せん

銀太 「どうもおめえのなりはベースとしないね。その白装束もうすよござれてるし、その前にだらりとたれている髪、櫛でもすいて切つてしまつてサッパリしたら、お前も役者ははしくれだ。その蒼白い顔に少しばは化粧でもしたらどうだね」

幽靈 「そうですかねえ」

銀太 「お前の目もだよ。どうしてそうギヨロ目なんだい。一寸は目をむさんで小さくしろよ。まるで『デメキン』

だ。それからお前の手だよ。体を半身にかまえて、左右の手の高さちがつて、手をぶらりといちらに手の背を向けてている」

幽靈 「これはユーレイの基本姿勢です」

銀太 「それじやこうしてみな。まず両手を同じ高さにして

手の平をこちらに向け、体の前で交互にぐるぐる同じ方向に円をえがく」

幽靈 「こうですかい」

銀太

「グルグルグルグル

とにもどる。その時、舌を出してパーと言う。つまりグルグルパーとなる

幽霊 「グルグルパー、グルグルパー」

銀太 「うめえ、うめえ、上出来だ。これに生前の得意の力

ンカンノー踊りをしながらやつてみよう」

「グルグルパーのカンカンノー」

銀太 「お見事、でかした。俺もテキ屋でこれから出掛けな

くちやならねえ。どうだいおれと一緒に仕事に回つてみねえか」

幽靈 「これも何かの御縁でしよう、御一緒させて下さい」

てな具合で二人は旅に出ます。

銀太は口上よろしく品物を売り、そばでユーレイが

グルグルパーのカンカンノーをしています。

銀太の口上は

「おやじおふくろ口うるさい、土手の柳は風まかせ、好いたあの子は口まかせ、ああシヨンガイナ、シヨンガイナ、生姜は八百屋で売っている。生姜は寿司にもついてくる。お寿司のお稻荷さんはいなりずし、大トロ小トロトロトロと、となりのちいさえトロトロひるね、そば

で猫もトロトロだ。その猫の尻尾をふんだらニヤンといって逃げていく。その後姿を見ていたら、結構毛だらけ猫灰だらけだ。お猿のおけつはまつかつか。まつかつかは赤とうがらし、とうがらしはピリッとからい。ピリッとしたら目がさめる。さめた所で手前とり出したるこのお品、お品、品川海に近い。海の向こうから日が昇る。昇る太陽アカアカだ。そこでやつぱり目がさめる。よう旦那、よくこの品見てこちら。今日は御当地で皮切りだ」

そばではユーレイが相変わらずグルグルパーのカンカンノーで踊っています。人はますます集まって商売繁盛、グルグルパーで目がまわります。

銀太

「ようユーリー公よ、おめえにはずいぶんかせがせてもらつたぜ。礼をいうぜ。このように毎日歩きまわつていると、つかれるだろう。この先にユーレイ屋敷というのがあるから、おめえそこで一つ興行をぶつてみては」

「私も昔とった杵柄きねねです。踊つて皆様に見て頂ければ役者冥利めいりにつきます。一つお願ひします」

そこでユーレイ屋敷に二人でいき相談すると、やつてみようということになりました。

**興行主** 「東西東西、世に珍しいユーレイのグルグルパーの

カンカンノ。まずは見てのお楽しみ、そんじよそこら  
じやお目にかかるないよ。さあ入った入った」

なんて調子で小屋も満員御礼の御盛況。

ユーレイはもう死人ですから食べるのもいりません。  
お給金もいりません。ユーレイも「せんど」を先途と一生懸

命踊ります。

やがて夏も終わり、秋風もそよそよという頃になると  
客足もとだえます。

**幽靈**

「あー本当につかれたよ。百年以上たつてこの世に出  
てみると昔とくらべて騒がしく、目がまわる。止まつて  
いたら後ろからけとばされる。横断歩道とやらも信号と

やらも訳のわからねえ」とばかし。じてもじやねえが、  
もうやつていられねえ。この世とおさらばして早くあの  
世に帰りてえ」



とドロンドロンと消えてしまいます。そこに  
銀太やって来て、

**銀太**

「あれー、とうとうユーロもおさらばしたか。本当に  
いい奴だつたがなあ。一年を四分の一（四季の内の夏だ  
け）で暮らすいい男とはユーロの事だ。気軽な稼業だぜ。  
一つ線香でも手向けよう」

その線香の匂いにさそわれてか、ユーロの声。

**幽靈**

「挨拶もしないで消えてしまって申しわけありません。  
いろいろお世話になりました。あの世から見守つておりますぜ」

**銀太**

「そんな事をいわず、また来年夏が来たら会おうぜ」

**幽靈**

「来年はまた別のところに出来ます。『昔の名前で出てい  
ます』（歌の名前）」